

「異文化理解 I」 (1年生)

木村 政子

土方 伸子 (文責)

1. はじめに

今年度は、学習指導要領改定の移行期にあたり、1年生には新課程の「総合的な学習の時間」である「異文化理解 I」、2年生には旧課程の「特設科目」である「異文化理解」を実施することになった。どちらの学年にとっても、異文化理解の授業は初めてであったので、同じような内容で授業を行うことも考えたが、1年間の高校英語の積み上げや地理の知識がある2年生とそれがない1年生とでは、やはり準備段階が異なるであろうということで、授業の内容を分けることにした。

1年生の「異文化理解 I」では、日本や身近にある違いに目を向ける、2年生の「異文化理解」では、途上国を含めた海外に目を向けるということを軸にして指導計画を立てることにした。

2. 授業内容

	回	月 日	1 学 期 授 業 内 容
1 学 期	1	4月15日	生徒自己紹介、授業内容概略説明、〈自分史を語る〉(教師編) 宿題：担当する内容(年中行事Ⅰ～Ⅲ、伝統芸能、伝統行事)に関する質問を1人20考えてくる。
	2	22日	〈自分史を語る〉(生徒編)
	3	5月6日	〈日本を知る〉各班に分かれて質問内容を発表、調べるトピック決定
	4	13日	6日(後半の授業内容)の続き(必要であればVIDEOやミュージックテープを探し始める。)
	5	5月20日	翌週からの発表に向けて調べ学習
	6	27日	〈日本を知る〉Ⅰ
	7	6月3日	〈日本を知る〉Ⅱ「年中行事」班発表(3月～6月班・7月～10月班・11月～2月班)(1班15分)
	8	10日	〈日本を知る〉Ⅲ「伝統文化」班、ディスカッション
	9	17日	〈日本を知る〉Ⅳ「伝統芸能」班発表、宿題：〈日本の料理〉のレシピを考えてくる
	10	7月1日	〈日本を知る〉Ⅴ「伝統芸能」班発表、〈日本の料理〉のレシピ決定
	11	8日	〈日本の料理〉(伝統料理・家庭料理・沖縄料理)
	12	7月15日	夏休みの課題レポートについて、e-palsへの会員登録及びe-palsの内容チェック
	夏 休 み		課題：「日本文化についてのレポート〈発展編〉+日本と他国の比較文化レポート」

	回	月 日	2 学 期 授 業 内 容
2 学 期	1	9月2日	夏休み課題レポートの要約解説、外国人生徒へのインタビューI (学校生活、日常生活について)
	2	9日	外国人生徒へのインタビューII (学校生活、日常生活についての続き)
	3	16日	夏休みの課題レポート発表I (10分(発表) + 5分(質疑応答) 3名)
	4	10月7日	夏休みの課題レポート発表II
	5	14日	夏休みの課題レポート発表III
	6	11月4日	食文化<タイ・韓国・スペイン>
	7	11日	夏休みの課題レポート発表IV
	8	18日	夏休みの課題レポート発表V
	9	25日	ビデオ<イスラム教>
	10	12月2日	食文化(フィリピン料理)

	回	月 日	3 学 期 授 業 内 容
3 学 期	1	1月13日	フィリピンの遊び(ティニクリング=バンブーダンス)、日本の遊び(百人一首)
	2	20日	異文化コミュニケーション<Bafa Bafa> I
	3	2月3日	異文化コミュニケーション<Bafa Bafa> II
	4	10日	異文化コミュニケーション<Bafa Bafa> III
	5	17日	異文化コミュニケーション<Bafa Bafa> IV
	6	24日	異文化を理解するために大切なことは何か
	7	3月2日	自分史を語るII、 一学期最初の<自分史を語る>を振りかえり、その時の自分と今の自分を比較する

1学期は、身近なものに目を向けるため、自分史を語る、日本を知るといった授業を行った。日本を知るでは、「年中行事」「伝統文化」「伝統芸能」「日本の料理」などを調べ、発表を行った。

夏休みの課題は、日本だけでなく、海外にも多少目を向けさせようと、「日本と他国(興味・関心のある国)の比較文化」をテーマにレポートを作成させた。

2学期は主にそのレポート発表を行った。1学期のレポート発表では要領を得ず、書いてあることを棒読みにする生徒が多かったため、2学期の発表では、発表原稿を用意し、発表時間を厳守するように、発表の仕方について事前説明をした。発表を聞く側には、メモの他、発表内容・発表の仕方・資料の見やすさなどについて発表者へアドバイスを書かせるようにした。これにより、1学期と比較すると、聞き手の立場にたって発表を工夫する生徒が増えたように思う。(資料1)

3学期は、異文化体験シュミレーション「Bafa Bafa」(出典: BaFa' BaFa': A Cross Culture Simulation 作者=Shirts. G. 販売: Simulation Training Systems)を4時間かけて行った。授業を進めるにあたっては、信州大学教育学部小池浩子先生がBaFa' BaFa'の一部を改変して作成された資料を基に、さらに本校の実態に合わせて改変した資料を使用した。(資料2参照)

<資料 2 >

1 年生異文化理解 異文化体験シュミレーション《Bafa Bafa》 2004.1.20 (火)

●目的

- ・異なる<文化>への訪問や共同作業を通じて、文化の違いとそこから生ずる諸問題を実体験する。
- ・文化の異なる人々とのコミュニケーションとはどういうものか、自分に欠けているものは何かなどの<気づき>を得る。

Bafa Bafa

もともと海外へ赴任する人たちが、赴任先の文化をより良く理解し、ローカルの人々と良い人間関係を結び、結果的に効果的な仕事をするようにと1970年代にUSAで開発された。

●異文化体験シュミレーション《Bafa Bafa》の進行

1/20	①	生徒は、 α 文化人、 β 文化人の2グループに分かれる。(α =調理、 β =応接)	日本語可
	②	割り当てられた文化を習得する。(35分) (α 、 β 両文化共に固有の価値観、社会組織、言語及び非言語コミュニケーション体系が設定されている。詳細については、各々の文化に配布されるプリントを参照。)	
2/3	③	α 、 β からそれぞれ一人ずつ相手文化へ「訪問」し、コミュニケーションをとる。 (3分×8(7)名+移動時間=約35分)	不可
	④	グループ全員が訪問を終えたところで、得られた情報を自分の文化の人々に日本語で報告する。	
2/10	⑤	振り返りのディスカッションを行う。(このシュミレーションで、何を体験したか、何を学んだかを話し合う。) 1) 相手文化を訪問したとき、自分がどんな気持ちになったか。 2) その時、相手文化の人たちには、どの様な印象を持ったか。	日本語可
2/17	⑥	・ α 、 β 文化のタネ明しをする。 ・「Bafa Bafaを体験して」気づいたことについてディスカッション	日本語可

約束事！

- ・シュミレーション中は時間を守り、指示に従い機敏に行動。(特に教室移動)
- ・振り返りのディスカッション(2/10)までは、自分の経験や考察を人に話さない。
- ・ α 、 β 共に、交流中にお互いの文化を教えたりしてはいけない。

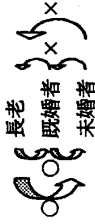
今後、このシュミレーションを受ける人たち(特に下級生)のために、具体的な内容について、絶対に公表しない!!

知ってしまうと、受けても効果が上がらないため。「知らない文化に行く」ことに意味がある!

α文化

【社会的地位】

- 社会的地位の低い人から先に地位の高い人に話しかけてはいけない。
- このルールを犯すと、国外追放になる。長老に耳打ちして知らせ、追放してもらう。(追放された者は自国に戻るが、制限時間がくるまでは部屋に入れない。)
- 同等の立場の人同士では、どちらがリーダーになってよい。



【α文化の主な特徴】

価値観	社交家として認められる＝尊敬される
社会組織	長老がいる (特別な役割がある) 社会的地位に応じた行動をする (長老・既婚者＜指輪をはめている＞・未婚者)
言語	オリジナル言語を持つ
非言語	対人距離が近い、触れ合う、にこやか

【社交の仕方：一般のルール】

目的：なるべく多くの人と、よい社交をし、結果としてサインをたくさん集めること。

- あいさつ1
 - 相手の体のどこかに触れる。(この人がこの会話の主導権を握る。いわばリーダー役)
 - 相手は、同じことをして返す。
- あいさつ2：配偶者の話をする。
 - 話を始めるきっかけとして、お互いの配偶者について話すのが慣例になっている。
 - まずリーダーが、「配偶者、元気？」＝「バラボー？」と尋ねる。
 - 相手は、配偶者がいれば、「元気。」＝「バラビー。」
 - 配偶者がいなければ、「配偶者はいない。」＝「ドジ。」と答え、今度は相手の配偶者について同様に尋ねる。
- あいさつ3：カードゲームをする。
 - 2枚のカード (Blimmer, Tibber) のどちらかを出し、相手と符号したかどうかを競う。
 - この会話のリーダー役が、このゲームでも親の役をし、カードを先に出す。
 - 一致＝親の勝ち・・・親がチップをもらう。
 - 不一致＝相手の勝ち・・・相手がチップをもらう。
 - ※ チップは慣例として(交流の潤滑油として)やり取りするだけで、金銭的価値はない。チップはなくなったら無料で補充できる。
- 社交を終らせる。：αカードにサインの交換
 - リーダーからαカードを差し出す。
 - ルールにのっとって、よい社交ができた団に、お互いに相手のカードへサインをする。
 - ※ サイン＝相手に判断不能なサイン (各自サインを決めておく)
- お互いに、あいさつ1で行ったように、あいさつをして別れる。
 - 相手の体のどこかに触れる。
 - 相手は、同じことをして返す。

【長老の立場と役目】

- 長老は、カードゲームに負けてもチップをもらえらる。(尊敬の意の表明)
- 国外追放者を追放する。(理由を説明せず「国外追放です。」＝「ペイッ!」とだけ言い、退場を命じる)
- 特別な場所にサインを与える。(αカードの中央下)。
- 一般人10人分のサインと同等の効力がある。つまり、皆長老と話したい。

【警告カード＝Stüpper】

- 相手が社交ルールに違反した場合は、警告カード (Stüpper) を示す。
 - するべきことをしない時 (②で配偶者の話をしない、③でチップを渡さない、など)
 - 余計なことをした時 (①でリーダーと違う動作を返す、⑤でカードを2枚見せる、など)
- Stüpper を3回出しても、社交が上手く続かなければ、その場で、サインではなく、数字を3つ (245、333など) 相手のαカードに書いて、その場を黙って立ち去る。

【「外国人」との接し方】

- 特別扱いはいらない。α人と同じように接する。
- αについて、一切説明をしない。「次はこれ。」という口に出さない。
- α人同士でも、大人は社交ルールについて知っているはずであるから、確認し合ったりしてはいけない。

【その他】

- 衣装…
- 音楽…
- 動作…

β文化

【β文化の主な特徴】

価値観	有能なトレーダーになり、国家に富をもたらす=尊敬される 効率を重んじ、簡潔な言葉やサインでトレーディングを行う（無駄話などをない）
社会組織	お互いに協力しあって、目標を達成する（win-win関係で） だれかが成功したら、みんなで喜ぶためたえる
言語	信号的音でカードの色や数を示す
非言語	はい、いいえ、もう一度言ってください、が各々ポディーランゲージで表される

【トレーディングの行い方】

目的：同色のカードを1〜7まで集めると、10ポイントの業績になる。

- 1 自分が提供しても良いカードを全て示しながら、相手に近づく。
- 2 欲しいカードの色と番号を記号的言語で示す。大きな声で！（β言語については下参照）
- 3 相手と同意した場合は、カードを交換する。（必ず双方が交換しなければならぬ）
- 4 同時に2枚以上のカードを交換することはできない。
- 5 同色で1〜7まで（ストレートフラッシュ）で集まったら、
 - ①銀行に提出し、②自分のサインをし、③銀行から業績印と新しいカードのセットをもらう。

↑相手に判断不能なサイン（各自サインを決めておく）

【β言語】

1 色の示し方：色の英語名のイニシャルにaをつける。

青：Ba 緑：Ga 黄：Ya 白：Wa ピンク：Pa 赤：Ra

2 数字の示し方：自分のイニシャルに0をつける。

AIUEOで始まるイニシャルは全て0で発音。

(例 Nobuko Hijikata=NH、NoとHoを交互に使用)

- | | | | |
|-----------------|--------------------|-----------------------|-----------------|
| 1 : No | 2 : No Ho | 3 : No Ho No | 4 : No Ho No Ho |
| 5 : No Ho Ho No | 6 : No Ho No Ho No | 7 : No Ho No Ho No Ho | |

∴青色の3が欲しい場合、「Ba, No Ho No。」と言う。

3 はい、いいえ、もう一度言ってください、が各々ポディーランゲージで表される。

はい：首を左右に振る いいえ：両肘を曲げ、脇を開閉

繰り返しの要請：胸を手の平で2度叩く

【外国人との接し方】

- ・ 特別扱いはしない。β人と同じように接する。
- ・ βについて、一切説明をしない。「次はこれ。」ということも口に出さない。
- ・ β人同士でも、大人はトレーディングルールについて知っているはずだから、確認し合ったりしてはいけない。
- ・ 噂では、彼らは3と5を豊富にもっているらしい。

3. 一年間の授業を終えて

3学期の最後に、Bafa Bafaをじっくり時間をかけて行ったことは、異文化理解の授業を締めくくるのに実に良い教材であったと思う。価値観・社会組織・言語などが全く異なる、まさに異文化へ一人で飛び込み、コミュニケーションをとろうと試みるが、言葉が通じなかったり、自国の文化で価値のあることが全く価値がなかったり、あるいは良かれと思ってとった行動により、国外へ追放されたりということを、生徒たちは体験する。1・2学期の調べ学習およびレポート発表を中心に行っていた授業とは異なり、頭の中で理解できた異文化とは全く違う異文化が存在し、そのような中では、言葉にし難い感覚を味わうことを体感した。体験によって得られる異文化理解である。

Bafa Bafaのまとめとして、また1年間のまとめとして、「異文化を理解する上で大切なことは何か」ということについて話し合ったが、生徒たちは、自らの体験により、こちらが学び取ってほしいと願う大切なポイントについて気づくことができたようだ。（資料3参照）

来年度も、体験的に異文化を理解するような授業を展開していきたいと思っている。

